

小学校水泳授業の現状と児童の学習意欲に関する検討

青井 唯

A study on learning motivation of children and current status of elementary school swimming lessons

Yui AOI

I. 研究目的

水泳は、水中という特殊環境で行う運動であり、誰もが親しむことができる運動である。そのため、生涯スポーツとして老若男女の区別なく、幅広い層の人に親しまれて行われている運動である。

小学校体育の新学習指導要領¹⁾の改訂ポイントとして、「生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現することを重視し、改善を図る」とされている。この目標を達成するためには、学校現場は児童が運動することへの楽しさを知り、積極的に運動に取り組むことが出来るような授業作りをしていかなければならないであろう。しかし、学校水泳は限られた施設を多くの学年、学級が利用するため、十分な時間が得られないことや授業は水温や天候に制限されがちになる。そのため、教材の取り扱いが困難と感じている教員も少なくないはずである。また、体育授業において授業に積極的に取り組む子どもとそうでない子どもの二極化²⁾も問題となっており、学校水泳での児童の泳力差については、スイミングスクールの存在が影響していると思われる。スイミングに通う子と通っていない子は非日常的な空間である水中での活動時間に大きな差ができるため泳力に大きな差ができてしまうのは当然であろう。

さらに、警察庁の平成24年中における日本で水難の発生件数から毎年水難による児童生徒の事故は絶えないことは問題となっている³⁾。児童が自分の命を自分で守るために着衣泳などの体験学習を行うことや水の事故防止についての知識をもつことは水難事故数から考えると大変重要なことであるが、安全水泳については十分に取られていないのが現状である。

そこで、本研究は、教員と児童それぞれの立場

から、現在自身が受けている水泳授業に対する意識を調査し、それぞれの実態を比較検討することにより、学校水泳の望ましいあり方を考察することを目的とした。

II. 研究方法

(1) 調査対象

愛知県内の小学校に所属する3, 4, 5, 6年児童1173名および、教員合計70名であった。有効回答数は児童1055名、教員61名であった。

(2) 調査内容

児童に対しての調査内容は「泳力に関する調査」、「水泳に対する意欲や関心」、「学校の水泳授業の意欲や関心」、「スイミングスクールの活動経験」の4分野で、質問項目は20項目であった。「一番印象に残った事」、「授業で怖かった事や嫌だった事」、「水泳が好きになった理由」については自由記述で回答を得た。

教員に対しての調査内容は、「水泳指導について」、「水泳指導の行い方」の2分野で、質問項目は26項目であった。「指導時に感じる問題点」、「水泳授業で望むこと」、「水泳授業が減少している傾向についてどう思うか」という項目については、自由記述で回答を得た。

(3) 統計処理

統計処理には、SPSS Ver. 21.0と4Steps Excel統計第3版を用いて分析を行った。児童のアンケート項目では、学年別、スイミングスクール経験別ともにノンパラメトリック検定法のクラスカル・ワーリス検定(Kruskal-wallis-test)により差をみた後、Steel-Dwass法による多重比較を行った。また、教員のアンケート項目で、それぞれの質問の関連をみるためにカイ二乗検定を行

い、その後残差分析を行った。児童と教員の水泳授業への意識差については、ノンパラメトリック法のマンホイットニー検定(Mann-Whitney test)を行った。それぞれ有意水準は5%未満とした。

Ⅲ. 結果

(1) 児童の水泳授業に対する考え

児童は、水泳を楽しんでいると感じ(76.5%)、水泳が上手になりたいと感じていることが明らかとなった(64.7%)。水泳時間においても楽しいと感じ、水泳の授業回数の増加を求める回答も多かった(74.3%)。しかし、授業の中で多く遊び要素を含んでほしいという希望も多かった(83.3%)。

学年別では、学年を経るごとに意欲の低下がみられた。児童のスイミングスクール経験者は55%であり、水泳や水泳授業の意識の高さを経験別で比較したところ、全体的に現在通っている群と今後通いたいと思っている群が高い値を示した。自由回答では、「印象に残ったこと」、「好きになった理由」では泳げるようになった、というような上達への喜びが多く挙げられた。

(2) 教員の水泳授業に対する考え

水泳の指導力に自信がない教員は75.4%、水泳の授業をできればやりたくないと思っている教員は62.3%であり、水泳の授業に対して消極的な意識であることが明らかとなった。授業内容について、水泳の時間が少ないと回答した教員は半数以下であった。

着衣泳の実施について、実施しているのは39.4%であり、半数以上の学校が着衣泳を実施してなかった。

(3) 泳げる基準

ほとんどの児童が「泳げる」と考える基準を25mとしていた(39.3%)。学年が上がるにつれ、基準としている距離は長くなっており、5m以下と答える児童も学年が上がるごとに減少していた。

スイミングスクール経験の有無での比較は、通ったことのある児童の基準とする距離は長く、スイミングスクール経験での大きな差がみられた。

Ⅳ. 考察

(1) 学校の水泳授業実施に関して

教員の水泳指導に対する問題点は児童の泳力差と関係していることが示された。多くの学校では、能力別指導が行われている。しかし、その際、安全面を配慮すると、教員の数が必要であり、指導者不足が一番の問題として挙げられる。したがって、能力別指導を行うためには、顔をつけられないなどの低レベルの児童を少なくする必要がある。低学年時での授業プログラムにより水への恐怖心を感じさせないなどのつまづきを減少させることが重要となる。

能力別指導は、教員にとって指導がしやすいと考えるが、泳力のない児童にとっては泳力で分けられることで技能面ばかり意識してしまい水泳を嫌いにしてしまう原因をつくってしまう可能性がある。一方で、山川(2004)⁴⁾は泳力のある児童には、小学校時に数kmも泳ぐことができたにも関わらず水の心地よさに気付かず、ただひたすら泳がされてばかりで自ら進んで学習に取り組む経験がなく、長く泳げる事実だけでは生涯にわたって水泳を楽しめる資質を培ったとは言えないと述べている。したがって、泳力向上のみに重視するのではなく、児童全員が楽しめるようなゲーム性の高い内容を取り入れるなど授業を工夫して行うことが重要であろう。

(2) 学校水泳の自由時間について

水泳の授業に対して遊びの時間をもっと増やしてほしいと回答した児童は83.3%であった。また、「印象に残ったこと」の回答で多かったのは自由時間であった。体育の他の領域の授業をみても、自由時間があるというのは稀である。佐藤(2009)⁵⁾はプールで自由に活動する時間は、子どもたちが何にも気兼ねなく水と関われる状況を作り出すためであり、子どもの感性が直接水とかかわることで、浮く感覚、水の抵抗、その抵抗で進んだりする感覚を味わえるようにしたいと考えたからであると述べている。しかし、児童にとって自由時間が遊びの時間となっている現状があり、指導力に自信のない教員が指導方法が分からず自由時間を設けているのか、本研究では判断するこ

とはできなかった。学校での水泳授業の自由時間は意図して設けているのか、それとも形式的になっているのか本研究では明らかにすることはできなかったが、自由時間を授業に設けるのであれば、児童にとって水泳技能向上につながる意味のある時間にすることがあるため教員は中学年までの水泳授業の自由時間に関して考え直す必要があり、水泳授業の自由時間についての意義を深めていくべきであると考え。

(3) 安全水泳に関して

着衣泳については多くの学校が行っておらず、教員の授業数の増加を望んでいる声は少ない結果が示された。また、泳げる基準を5m以下と回答する児童に関して安全面で考えると、5mしか泳げない子どもが川や海で泳ぐことが困難であることは明白である。このことから、身を守る為の水泳技術の指導まで水泳授業が行き届いていないのが現状であると考えられる。

したがって、自らの命を守ることでできる安全水泳として授業内容に多く取り入れられる必要がある。また、溺れないためには呼吸法や浮き・浮標の基礎的技術の習得が重要であると考え。

V. まとめ

児童は水泳に対して積極的であり、水泳の授業を楽しみにしている者や泳げるようになりたいと思っている者がほとんどであった。しかし、多くの児童が自由時間をもっと増やしてほしいと思っていることから水泳授業に関して楽しいと感じているのは技能が向上することで自由時間のことであるのかは本研究で検討できなかった。一方で、教員は、水泳授業に対して消極的な意見も目立ち、外部指導者により授業を実施することへの要望も多くあったことから、水泳の授業に対して教員の指導面、監視を含めた指導体制など授業を実施することに困難を感じる点があると考えられる。各学校で能力別や泳力別のプログラムを授業で多く取り入れる傾向があるが、これは指導力に自信がないためであるかもしれない。

今後の課題として、児童が水泳の楽しさを実感し、児童自身が身体をコントロールすることに

よって最終的に泳げるような授業プログラムを考えていく必要がある。また、水泳授業における自由時間の活動が水泳授業に及ぼす影響を検討することも、児童にとっての有意義な水泳の時間をもたらすためのポイントとなると考えられる。施設面に関しては、児童が安全に泳力を向上させることができるような体制づくりを学校全体で検討する必要があると考える。本研究では、児童や教員の水泳授業に対する意識から、学校の水泳授業に多くの問題点が挙げられた。今後学校全体で改善していく必要がある。

VI. 参考文献

- 1) 文部科学省:小学校学習指導要領解説 体育編: 2008
- 2) 中央教育審議会:子どもの体力向上のための総合的な方策について(答申):2002
- 3) 警察庁生活安全局地域課:平成24年中における水難の概況:2013
- 4) 山川寿夫:泳ぎにつながる水慣れやゲームの授業. 体育科教育 第52巻第8号:28-31, 2004
- 5) 佐藤正樹:子どもが学びたくなる授業の創造. 教育実践研究第19巻:135-140, 2009
(指導教員 寺本圭輔)